

## 岡野大嗣ロングインタビューより 田中拓也

「短歌研究」二〇二二年八月号の特集「短歌ブーム」の柱は「岡野大嗣ロングインタビュー&新作（聞き手スケザネ）」であった。岡野大嗣は二〇一四年に「選択と削除」で第五七回短歌研究新人賞の次席となり、同年に第一歌集『サイレンと犀』（書肆侃侃房）を刊行。これまでに三冊の歌集の他、谷川俊太郎・木下龍也との共著『今日は誰にも愛されなかった』（ナナロク社）の刊行やガングレーターの歌集の監修をするなど幅広く活動しており、現在最も活躍している歌人の一人と言えるだろう。そんな岡野に焦点を当てた今回の企画はその作品を読む上でも意義あるものと思う。

まず、同企画の中の「岡野大嗣二十首選（渡辺祐真／スケザネ選）」の一部を紹介したい。

・将棋盤と駒はあるのに飛車好きの祖父だけいけない祖父がいた部屋

『サイレンと犀』より

・次にやる曲のさわりを鳴らすようにつつじが咲きかけの並木道

『たやすみなさい』より

・いつかすっかりしぼんだ背中をさするだろう子犬のときから知っている手

『音楽』より

口語定型詩の特性を踏まえた愛誦性のあるいい短歌と思う。先端的な表現方法を追究しているわけでもない、独自性の強い特殊な主題を展開しているわけでもない。読んだ時にほっとした読後

感の残る作品である。私は岡野の作品では「ゴッホでもミレーでもない僕がいて時きたい種を探す夕暮れ」や「僕ひとり乗せた車で僕はいま僕の命を預かっている」（『サイレンと犀』）等の作品に魅力を感じているが、その魅力は「新しさ」というよりも「懐かしさ」にあるように思っている。今回のインタビュー記事を読みつつ、その念を強くした。

新聞や雑誌のインタビューなどでも、「今の短歌は昔と違うのですよ」、「ツイッターでバズったり、若い人の間でカジュアルに自分たちが普段使っている言葉で書かれているよ」ということをとにかく言いたいんだらうなど、その前提で発言を引き出そうとされていると感じることが多くあります。でもそれは全部昔の短歌からあることで、石川啄木もやっています、と。

同インタビューの発言から垣間見えてくるのは短歌という詩型に対する信頼と読者を大切にする明確な意志であった。それは「僕にとって読者とは一群ではなく、一人一人の顔が浮かぶ存在です。」といった言葉に現れていると言えるだろう。

岡野が作歌を始めた時期はSNSが急速に普及した時期と重なる。その作品の発表の場はTwitter上が中心であり、それらをまとめたものが歌集となり刊行されるというスタイルとなっている。これまでもそうした発表形式を取る歌人はいたが、岡野の独自性は不特定多数の読者を意識するよりも、顔の見える読者を大切にすると「潔さ」にあると言えるだろう。それは、従来の雑誌等に発表された作品を仲間が中心となって作品を読むというスタイルと共通している部分もある。SNSがもたらした現代短歌の世界の先端に岡野大嗣とその読者が存在しているように思う。